

1. 縄文時代早期の集落構成について

て厨房空間の対岸に想定しなければならない。そうならば、尾根上でもその中心部ではなく、どちらかに偏った場所かもしれない。

こうした集落構成が、実はこの遺跡の中に幾つか見られるのである。それは、調査区の谷部ごとに見られる厨房施設によって窺い知ることができる。すなわち、調査区の西端の厨房施設であり、中央部のそれ、そして、調査区外でその東側の道路切通し南面にみられる炉穴の断面である。つまり、無田原遺跡では、最低でも三つの厨房空間が残されているのである。これを三つの集落構成の集合と見てみよう。ここで問題は、この集合を同時併存とみるのか、時期を異にすると見るかである。仮に、同時併存とみるならば、複数の集団が一つの空間に居住していると解釈しなければならないし、仮に、異なる時期ならば、集落の漸次的な移動ということを考えなければならない。これについては、結論を急ぐ必要はないが、遺物の分布が遺跡全面にみられるということからすれば、集落の漸次的な移動がもっとも可能性が高い解釈であろう。つまり、生活廃棄物の集積が元の生活空間や北斜面で繰り返された結果、広い範

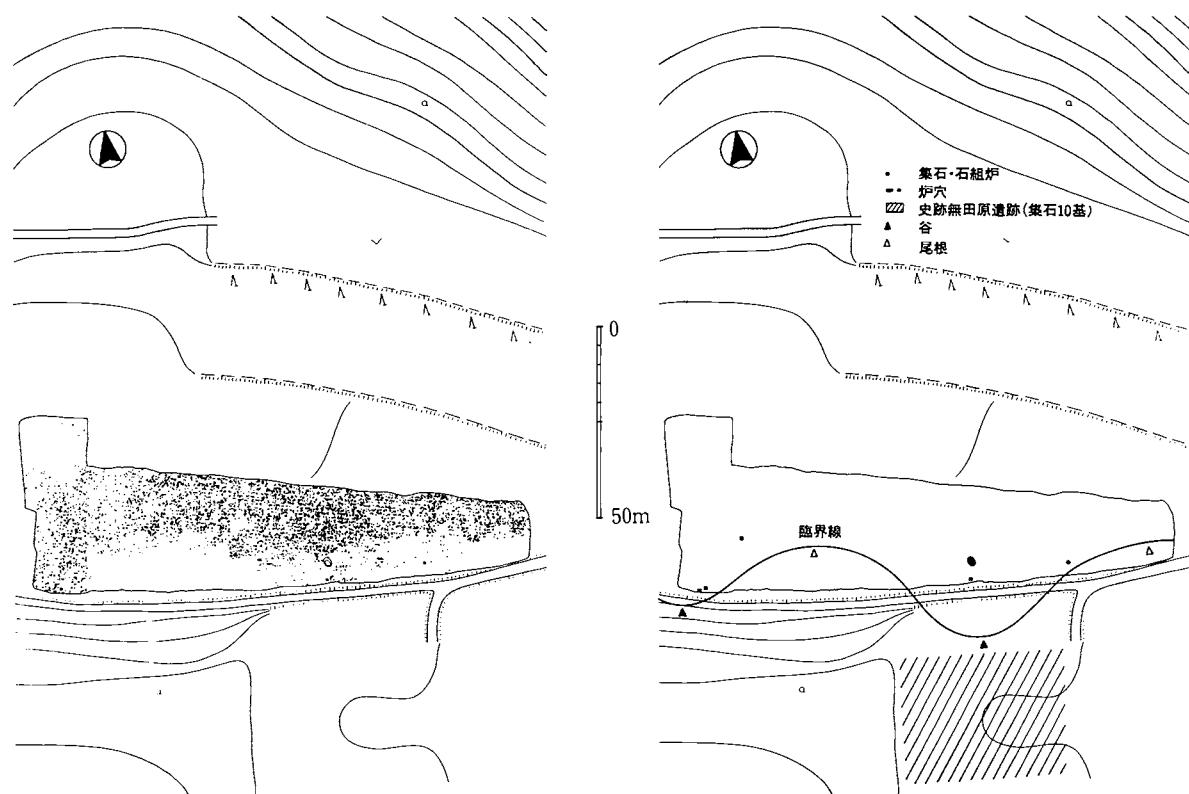
囲の遺物・礫分布が形成されたとする方が容易に理解できるのである。

以上のように、無田原遺跡の集落構成について、私は、次のような認識をおこなった。

1. 炉穴や集石など、集落内の厨房施設は、谷最上部から谷頭上の平坦面にかけて設けられていた。
2. 集落全体については、他の遺跡での調査例から考えて、厨房空間と居住空間、そしてその間にある広場というレイアウトが考えやすい。
3. 遺跡の中に、三つ以上の集落単位が見出せる。
4. これは、集落の漸次的な移動を考えることがもつとも理解しやすい。

2. 沈目式土器と石清水式土器—中九州西部押型文土器編年に関する予察—

無田原遺跡では、多量の押型文土器が出土した。その種類は、単純なもので格子目文・楕円文・山形文、この他に交錯したものではそれぞれの文様の併用や異なる文様との併用がある。ここでは、こうした土器群を、型式学的に整理し、編年研究が遅れている中九州西部における押型文土器編年への見通し



第225図 縄文時代早期集落のモデル(無田原遺跡)

を立てようとするところに主眼がある。そのキーワードは、「沈目式土器・石清水式土器の設定」である。

無田原遺跡で出土した押型文土器をみてみると、幾つかの型式的特徴をそれぞれの文様帯の中で見出すことができる。文様ごとに整理してみよう。

[胴部上半ー口縁部周辺]

表面の文様の特徴の一つとして、口縁部周辺の施文方向があるので、これを対象にした型式学的分類をおこなう。

格子目文土器

I 横位施文の土器。

II 縦位施文の土器。

楕円文土器

I 横位施文の土器。

II 縦位施文の土器。

山形文土器

I 横位施文の土器。

II 縦位施文の土器。

なお、表面に複数の文様帯がみられる土器がある。その中では、胴部下半と胴部上半に分割される土器がもっとも多い。この場合、口縁部の施文方向に直行するのが胴下半の方向である。

[口縁部裏面]

格子目文土器

A 原体条痕を持つ土器。

B 横位の格子目文が施された土器。

楕円文土器

A 原体条痕を持つ土器。

B 横位の楕円文が施された土器。

C 無文の土器。

山形文土器

A 原体条痕を持つ土器。

B 横位の山形文が施された土器。

C 無文の土器。

こうした縦割りの土器裏面文様の特徴を、横割りにして型式学的に整理すれば、それぞれの文様の土器は、A, B, Cという種類にまとめなおすことができる。

[その他の型式的特徴]

上記二点の他、もう一つの型式的特徴がある。

それは、表面にみられる磨り消し手法である。そこで、これも分類要素の一つとして採用し、施される土器を a, されない土器を b としよう。

上記三点の型式的特徴を基にして、無田原遺跡出土の押型文土器を分類してみれば、七つの類型にまとめることができる。

一つ目は、口縁部表面周辺が横位施文(I), 裏面が原体条痕(A), 表面上に磨り消し手法がみられない(b)土器である。これを I A b 類の土器としよう。格子目文土器 2, 楕円文土器第86図10・12・13・16・17・19, 山形文土器第136図18・19がこれにあたる。

二つ目は、口縁部表面周辺が横位施文(I), 裏面が横位施文(B), 表面上に磨り消し手法がみられない(b)土器である。これを I B b 類の土器としよう。楕円文土器28, 39, 41, 42, 56, 第84図8・13・17・18・28・31, 第85図3・10・15・16・20~22・24・26・29・30・34, 山形文土器5, 10, 11, 第134図1~5がこれにあたる。各類型の中でも、比較的出土点数が多い類型である。

三つ目は、口縁部表面周辺が縦位施文(II), 裏面が原体条痕(A), 表面上に磨り消し手法がみられない(b)土器である。これを II A b 類の土器としよう。楕円文土器13, 17, 第86図11・14・15・18, 山形文土器18がこれにあたる。

四つ目は、口縁部表面周辺が縦位施文(II), 裏面が横位条痕(B), 表面上に磨り消し手法がみられる(a)土器である。これを II B a 類の土器としよう。格子目文土器1と山形文土器6, 第83図18がある。

五つ目は、口縁部表面周辺が縦位施文(II), 裏面が横位施文(B), 表面上に磨り消し手法がみられない(b)土器である。これを II B b 類の土器とする。楕円文土器1, 3, 5, 10~12, 15, 16, 18, 30, 33, 52, 54, 55, 72~74, 76, 79, 97, 第82図1~5, 7~第83図17, 第84図1~7, 9~12, 14~16, 19~17, 29, 30, 第85図1・2・4~9, 11~14・17~19・23・25・27・28・31~33・35と山形文土器1~4, 7, 9, 12~14, 16, 17, 19~23, 第86図1~9, 第134図6~第136図15がある。無田原遺跡出土の土器の中で、もっとも出土点数が多い類型である。

六つ目は、口縁部表面周辺が横位施文(I)，裏面が無文(C)の土器である。これをI C類の土器としよう。楕円文土器第86図21・22・25，山形文土器第136図20～24がある。

七つ目は、口縁部表面周辺が縦位施文(II)，裏面が無文(C)の土器である。これをII C類の土器としよう。楕円文土器第86図23・25，山形文土器第136図25～31がある。

以上のように、無田原遺跡出土の押型文土器は、IA b類・IB b類・II A b類・II B a類・II B b類・I C類・II C類という類型に細分される。こうした細分を基にして、次に型式学的検討をおこないたい。

器形からみてみよう。出土した土器の口縁は、ほとんどのものが外反している。また、底部形態は、出土点数が少なく、その実態が判らないが、出土している資料は、丸底を中心で、平底を窺わせる資料も一部存在する。このように、無田原遺跡出土の押型文土器は、口縁が外反する丸底の土器を中心で、一部平底も存在する、という整理が可能である。

次に、表面の文様施文方向をみてみよう。無田原遺跡出土の押型文土器の特徴は、施文方向を違える二つ以上の文様帯に区分可能であることである。また、資料の中には横位施文と縦位施文とを組み合わせたものまで存在する。つまり、中九州東部(大分県)で行われている、土器表面の施文方向を型式表徴の一つとみなした編年研究は、無田原遺跡周辺では不可能だということである。

裏面の文様では、原体条痕と横位施文、そして無文がある。これらをまとめれば、一つにIA b類・II A b類、一つにIB b類・II B b類・II B a類、もう一つにI C類・II C類として整理できる。先に、表面の施文方向については型式表徴に成りえないことを述べたが、裏面文様では土器間に交錯した状況が見られず、整然とした整理が可能である。従って、これを型式表徴の一つと見なし、それぞれを型式学的に独立した集団としたい。なお、出土土器の数を見てみると、II B b類がもっとも多く、次にIB b類がくることから、無田原遺跡の押型文土器では、II B b類とIB b類が主体的で、その他の土器は客

体的であることが判ろう(第226図)。

では、型式学的検討を加えたそれぞれの土器類型は、さて中九州西部の早期編年の中でどの位置にあるのだろうか。次の検討課題としてみよう。

中九州西部では、幾つかの早期遺跡が調査されている。その中で、無田原遺跡近くでは大津町瀬田裏遺跡と同町中後迫遺跡の調査報告書が刊行され、その様相を知ることができる。そこで、ここで出土した土器群について、型式学的検討を加えたいと思う。

瀬田裏遺跡出土の押型文土器は、以下の五類に分類される(第227図)。I類土器は、直口した口縁部で、胴部も直線的である。文様は横位施文の押型文で、表面全面と裏面口縁部に見られるが、中には表面口縁部直下に無文帯が見られるものも存在する。底部は、尖底である。II類は、裏面口縁部に原体条痕と横位施文押型文を併用した文様帯が存在する土器である。胴部から口縁部へと直線的にのびていく。底部は、尖底である。III類は、原体条痕と、横位施文の押型文や撚糸文を併用した文様帯が裏面口縁部に存在する土器である。しゃくれながら外反する口縁部と丸みを帯びる胴部に特徴がある。尖底と平底の二者が存在する。壺形を呈する注口土器の一部がこの類型に属する。IV類は、しゃくれながら外反する口縁部と丸みを帯びる胴部の土器である。裏面口縁部の文様からaとbの二つに細分される。IV a類は短い原体条痕で、IV b類は横位施文の押型文や撚糸文である。尖底・丸底・平底がある。V類は、裏面口縁部に長く太い原体条痕がみられる土器である。器形は、しゃくれながら外反する口縁部と丸みを帯びる胴部である。底部は、明確ではないが、平底と尖底(注口土器)が存在するだろう。

中後迫遺跡では、出土した押型文土器を四類に分類できる(第227図)。I類土器は、表面と裏面口縁部に施文される土器で、胴部から口縁部へ直線的に開くという器形をとる。底部は、尖底であろう。II類は、裏面口縁部の文様帯に原体条痕と横位施文押型文を施される。尖底から胴部、そして口縁部へと直線的に開いていく。III類は、原体条痕と、横位施文の押型文や撚糸文が裏面口縁部に施される土器である。器形は、しゃくれながら外反する口縁部と丸

みを帯びる胴部に特徴がある。尖底と平底がある。IV類は、しゃくれた外反口縁と丸みを帯びる胴部の土器である。裏面口縁部の文様からaとbの二つに細分される。IVa類は短い原体条痕で、IVb類は横位施文の押型文や撲糸文である。丸底と平底があるようだ。

以上、二つの遺跡の押型文土器を検討してきたので、今度はそれぞれの遺跡で分類されたそれぞれの類型を、その型式表徴を基にして比較してみよう。そうすれば、瀬田裏遺跡I類と中後追遺跡I類、瀬田裏遺跡II類と中後追遺跡II類、瀬田裏遺跡III類と中後追遺跡III類、瀬田裏遺跡IVa類と中後追遺跡IVa類、瀬田裏遺跡IVb類と中後追遺跡IVb類という対応関係が見て取れる。そこで、この二つの遺跡で対応させた各類型の土器を、それぞれI類・II類・III類・IVa類・IVb類・V類と呼ぶことにしよう(第227図)。では、このI類からV類の土器は、それぞれどの様な型式的関係にあるのだろうか。そこで、洞穴遺跡の調査成果を援用することによって、押型文土器編年研究が進んでいる中九州東部(大分県)との型式学的な比較をおこないたいと思う。

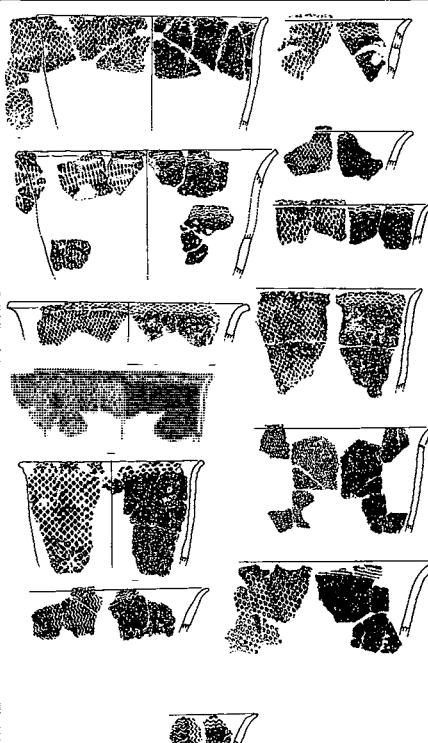
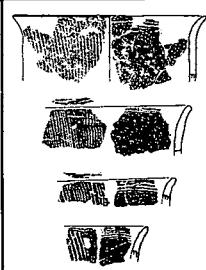
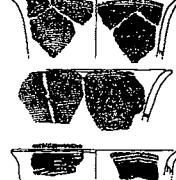
中九州東部での押型文土器編年は、「①川原田式→②稻荷山式→③早水台式→④下菅生B式→⑤田村式→⑥ヤトコロ式」である。その型式的特徴を組列化すれば、「①直口口縁・尖底・表裏面横位帶状施文→②直口口縁・尖底・表裏面横位施文→③直口口縁・尖底・表面横位施文で裏面原体条痕+横位施文→④外反口縁・尖底・表面縦位施文で裏面原体条痕(短い)+横位施文→⑤外反口縁・丸底・表面縦位施文で裏面原体条痕(長大)→⑥外反口縁・平底・表面縦位施文・裏面横位施文」ということになる。こうして整理した結果を参考にして、瀬田裏遺跡と中後追遺跡で認識した各類型の土器をそれぞれの土器型式に対比していこう。

I類土器は、直口口縁で尖底という器形をとり、表面と裏面口縁部に押型文が施される土器である。この特徴から、稻荷山式土器に近い土器であることが判る。II類土器は、裏面口縁部の原体条痕と横位施文押型文と直口口縁、そして、尖底という特徴がある。このことから、早水台式土器に対応する土器

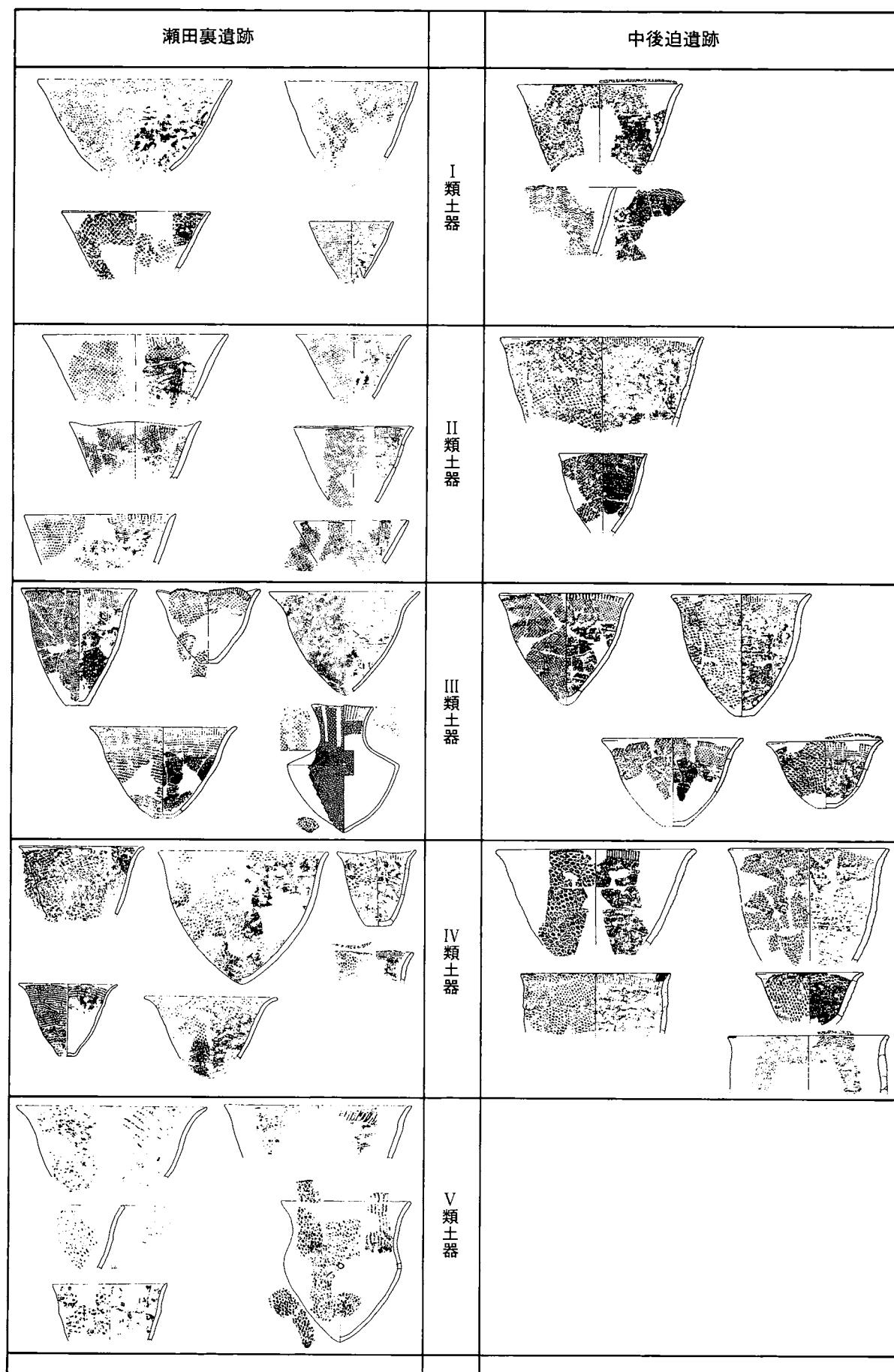
のようだ。III類は、原体条痕と横位施文押型文が裏面口縁部に施される土器で、しゃくれながら外反する口縁部と丸みを帯びる胴部という器形に特徴がある。これは、下菅生B式土器に見られる特徴である。IV類は、しゃくれた外反口縁と丸みを帯びる胴部の土器で、裏面口縁部の文様が、短い原体条痕(IVa)と横位施文押型文(IVb)がある。この特徴を示す土器型式は、中九州東部では見当たらず、中九州西部独特の土器型式の一つとして注意が必要である。おそらく、下菅生B式土器の裏面口縁部文様である原体条痕と横位施文押型文がそれぞれ独立した結果の土器であろうから、下菅生B式土器の次の段階以降ということになる。V類は、裏面口縁部に長く太い原体条痕がみられる土器で、しゃくれながら外反する口縁部と丸みを帯びる胴部という器形をとる。これは田村式土器の特徴である。したがって、編年的には下菅生B式土器の後に置かれるIV類とV類とは、時期的に一時併存するはずである。

以上、中九州東部の土器型式と瀬田裏遺跡と中後追遺跡で認識した各類型とを対比してきた。その結果、この両遺跡には、稻荷山式土器以降の各土器型式が見られることが判り、しかも「I類→II類→III類→IV類・V類」という変遷を示すことが類推できた。また、現状で見るかぎり、中九州西部では川原田式土器に対応する土器は見つかっていないので、中九州西部での押型文土器の使用開始は、稻荷山式土器の段階ということも明らかになった。こうした結果を踏まえて、再び、無田原遺跡の土器に立ち戻り、その位置付けを考えてみたい。

無田原遺跡では、IAb類・IIB類とIAb類・IIB類・IIBa類、そしてIC類・IIC類という三つの群に整理される押型文土器が出土している。一部を除けばほとんどのものが外反する口縁で、頸部がわずかにくびれ、胴部では丸みを持つという器形である。裏面口縁部の文様は、原体条痕(A)と横位施文押型文(B)を中心である。つまり、これは、上記してきたI類からV類の中のIVa類やIVb類の特徴なのである。しかも、裏面口縁部文様からは、IVa類とIAb類・IIB類が、IVb類とIAb類・IIB類・IIBa類がそれぞれ対応するので

	撚糸文・条痕	押型文	撚糸文・条痕
口縁縦位施文		A  B 	
縦横複合			
口縁横位施文		 沈目式土器 	
裏面口線無文			
その他			

第226図 無田原遺跡出土押型文土器の諸類型



第227図 瀬田裏遺跡・中後迫遺跡出土押型文土器の類型

ある。ここによく、無田原遺跡出土の押型文土器が、瀬田裏・中後迫の両遺跡のIV類の段階、すなわち中九州東部編年の中で田村式土器以降という編年的位置が明らかにできた。

こうした結果を受けて、最後に中九州西部の押型文土器の編年を予察してみよう。

先にも述べておいたが、これまでのところ、中九州西部では帶状施文押型文土器の出土例が無い。したがって、本地域における押型文土器の最古型式は稻荷山式土器であるようだ。つまり、本地域へ最初に伝わった押型文土器は、稻荷山式土器であった可能性が高いのである。そして、本地域では、しばらくの間、中九州東部の型式変遷の動態に連動する形で、早水台式土器そして下菅生B式土器に対応する土器が使われていった。しかし、こうした中九州東

部に連動した型式変遷とはいっても、それぞれの土器の特徴が完全に合致するというわけではない。それは、土器表面の施文方向に違いがあるからだ。例えば、中九州東部の土器は、稻荷山式土器と早水台式土器が横位施文、下菅生B式土器は縦位施文という厳格な施文原理が存在するのに対して、西部では両者が存在したり、また同一器面の中で併用されているものまである。つまり、こうした状況を周辺地域における施文原理の曖昧化からくる地域性として認識すれば、別に器面の施文方向を中九州西部での型式表徴としなくともいいことが判る。したがって、今回は、器形や裏面口縁部文様を型式表徴として採用し、その動態を中九州東部との対比の中で明らかにしようとしたのである。その結果、中九州西部にあっても、「稻荷山式→早水台式→下菅生B式」とい



第228図 沈目式土器(左)と石清水式土器(右)の標式土器

う型式変遷を認め、その型式名を準用することがより実態にあった方法と判断した。

さて、次の時期、田村式土器の段階は、どうだろうか。私は、この段階になって初めて、中九州西部の独自性が出てくると考えた。それは、瀬田裏遺跡や中後追遺跡IV a類とIV b類や無田原遺跡 I A b類・II A b類・I B b類・II B b類・II B a類の存在から、そう判断したのである。そうはいっても、瀬田裏遺跡では、V類とした土器、田村式土器が出土しているのも事実である。ただし、その出土の仕方は、あくまでも客体的であり、IV類土器の状況とは大きく異なっている。これは、すなわち、中九州西部においては田村式土器が一つの時期を代表する存在でなく、あくまでも移入系の土器であることを示しているのではないかと考えたのだ。要するに、瀬田裏遺跡や中後追遺跡IV a類とIV b類や無田原遺跡 I A b類・II A b類・I B b類・II B b類・II B a類が中九州西部の独自の土器であり、この時期に東部方面から田村式土器が移入してきたということであろう。ここに、瀬田裏遺跡や中後追遺跡のIV a類とIV b類や無田原遺跡の I A b類・II A b類・I B b類・II B b類・II B a類を対象として、新たな土器型式を中九州西部地域に設定する必要が出てきた。

そこで、思い浮かぶのが、石清水式土器(小林1936)や沈目式土器(小林1957、三島1965、乙益1967)という土器型式である。これらが、先に提起した「新たな土器型式」になりえないか、みてみる必要があるだろう。

「沈目式土器」は、小林久雄氏が設定した土器型式である。小林氏は、城南町沈目周辺で採集した資料を1934年～1939年に紹介し、その後、1957年に型式名を活字で公表した。また、三島格氏は、「城南町史」(1957)の中で、「器形は、底部が平底をなし、口縁がやや外反し、器面に山形・穀粒文(橢円文)・格子目文・条痕文の押捺が施されたもの」という説明をおこなった。そこで、小林氏によって提示された土器の実測図を検討してみよう。多くのものが外反する口縁で、裏面には原体条痕のみのものと押型文横位施文のみのものがあることがわかる(第228図)。この特徴は、瀬田裏遺跡や中後追遺跡IV a類と

IV b類や無田原遺跡 I A b類・II A b類・I B b類・II B b類・II B a類と合致する。つまり、古くに設定された「沈目式土器」の存在が、「新たな土器型式」として、にわかに浮かび上がるるのである。

次に、「沈目式土器」と共に、古くに設定された土器型式の「石清水式土器」をみてみよう。高田素次氏が1935年に人吉市石清水遺跡で発見し、小林久雄氏が1939年に紹介した土器である。「口縁に近く環行する横直線がある外は、口縁より底部に至るまで一面に山形連続文が施され、内面にも口縁に近い部分に同種文様が附せられ」、「形態は稍大きな深鉢形で口縁は外曲し、胴部には上下二箇所に膨みがあり、底部は平底で上げ底になつてゐる」という説明があった。提示された土器の実測図では、上下二箇所が膨らんだ円筒形の土器であるが、近年、松舟博満氏によって復元がおこなわれ、その結果、膨らんだ胴部、ややしまった頸部と外反する口縁部という器形であることが判った(第228図)。文様は、表面で縦に近い斜位山形文、裏面口縁部で横位山形文である。器形と裏面口縁部の施文状況をみれば、これも瀬田裏遺跡や中後追遺跡IV a類とIV b類や無田原遺跡 I A b類・II A b類・I B b類・II B b類・II B a類に近似することが判る。ただし、底部が上げ底であり、押型文が間のびしている点からは、手向山式土器に近い特徴も備えていることには注意が必要である。

以上のように、各型式設定時点で提示されていた資料とその説明を勘案すれば、今回、「新たな土器型式の設定」を意識させた、瀬田裏遺跡や中後追遺跡IV a類とIV b類や無田原遺跡 I A b類・II A b類・I B b類・II B b類・II B a類は、上記二つの土器型式に近似していることが判る。そこで、この二つをもって、下菅生B式土器の次にくる土器型式と認めよう。しかも、石清水式土器は、その文様の特徴や上げ底をなす平底という点で、手向山式土器に近い型式的特徴を示しており、沈目式土器よりも後出の土器型式と考えて差し支えないだろう。なお、今回報告した無田原遺跡では、沈目式土器の他、石清水式土器に属する資料も出土している。例えば、器形が明確なものは格子目文土器1のみであるが、この他に原体の彫り込みが浅く、間のびした文様の土

第5表 早期前半編年表

	中九州東部	中九州西部	南九州西部
早期前半	政所式 川原田式 稻荷山式 早水台式 下菅生B式 田村式 ヤトコロ式	中原式 稻荷山式 早水台式 下菅生B式 沈目式 石清水式	前平式 知览式 吉田式 倉園B式 石坂式 (押型文土器) 手向山式 桑ノ丸式
		?	
			—
	大分県編年	木崎編年(1995)	新東編年(1992)

器がそれにあたろう。また、類手向山式土器として第III章で報告している屈曲胴部を持たない土器も、この型式に属するものであろう。

このように、中九州西部地域の押型文土器は、「稻荷山式→早水台式→下菅生B式→沈目式土器→石清水式土器」という変遷を示すことが判った。これを編年表として提示し、併せて、中九州東部と南九州西部との編年対比を試みている（第5表）。

なお、ここでは言及しなかった土器として、撚糸文土器・条痕土器・無文土器がある。こうした土器もまた、型式学的研究をおこなうことによって、編年的な検討が可能となろう。ただし、今回は時間的な制約があって、ここまで検討範囲を広げられなかった。そうはいっても、こうした問題を解決することが、編年研究が遅れている中九州西部地域の現状を打破することもある。今後、こうした方面までも検討の対象にする機会が必要であろう。

3. 石器組成から見る食物獲得活動の特徴

無田原遺跡における縄文時代早期の石器組成についてみてみよう。関係資料310点の中、石鏃11点、尖頭器1点、尖頭石器6点、削器14点、抉入石器1点、石錐1点、楔形石器5点、打製石斧1点、石錘4点、有溝砥石1点、磨石・敲石14点、石皿・台石4点、

二次加工ある不定形石器10点、使用痕ある剝片10点、石製品4点、石核21点、剝片・碎片202点という内訳であった。これをそれぞれの活動の種類ごとに区分してみてみよう。

狩猟・漁撈具は、石鏃、尖頭器、尖頭石器、石錘がそれである。出土点数は22点で、石器の中に占める割合は27%で、狩猟具のみでは22%である。

植物食処理具は、磨石・敲石と石皿・台石である。出土点数は18点で、石器の中では22%という割合である。

解体・工作具は、豊富である。その該当石器には、削器、抉入石器、石錐、楔形石器、打製石斧、有溝砥石、二次加工ある不定形石器、使用痕ある剝片がある。出土点数は43点で、石器組成の中に占める割合は、51%である。なお、こうした石器も、その用途別にさらに区分されるかもしれない。例えば、解体調理と工作は、その区分原理としてもっとも考え易いものである。ただし、ここではそこまで突っ込んだ検討をする訳ではないので、一括して処理している。

祭祀関係の道具は石製品である。4点が出土している。

さて、無田原遺跡での生産活動を問題にする時、狩猟・漁撈活動と植物食獲得活動の比率を石器組成